

彙 報

アンネマリー・フオン・ガベン教授

(一九〇一・七・四—一九九三・一・一五)

梅 村 坦

私事ながら、ガベン女史の訃報は、ベルリンにおける女史の高弟ペーター・ツィーメ氏から受け取った。「アンネマリー・フオン・ガベン教授、マリアマリアバが先週金曜日、一月一五日に九〇歳で亡くなったと、つい数分前の電話で知りました。私たちは皆悲しみでいっぱいです。葬儀は一月二八日に執り行われます。クリスマスの二週間前、アカデミーにお呼びして楽しくすごしたことがよい思い出となりました」。一月一八日付けの手紙であった。一九九三年のことである。行年は満九一歳であるのを書き違え、また発信の日付を一九九二年とタイプした手紙からツィーメ氏の動揺を感じとった。

はや三年の歳月が流れた。この間に追悼文がいくつも公になり、また追悼記念シンポジウムが“Amenerie von

Gabain und die Turlanforschung”という名称のもとで、一九九四年二月九日—一二日にベルリン・ブランデンブルグ科学アカデミーで開かれた。参加者は一三カ国、七〇名近くに及び、世界におけるトゥルファン学研究のひろがり<sup>(1)</sup>と奥行き<sup>(2)</sup>の深さを示した。テュルコロジすなわちテュルク言語学・文献学・ウイグル学をしてトゥルファン学などの分野における女史の功績の偉大さについて多くが語られ、また語り継がれようとしている。ガベン女史は半世紀以上にわたって、その先導者であった。これらの研究分野が日本においてもほぼ定着している現状の大きな源のひとつになったのがガベン女史の存在であったことは誰もが知るところであろう。日本におけるガベン女史の学問は、のちにも触れるように護雅夫、山田信夫両氏によつて具体的に継承された。山田氏は一九八七年に他界された。ガベン女史にじきじきの教えを受けられ、学問以外の交流も深かった護氏だけが、今やわが国でこの文章を書く資格を有し、またそれがもつとも意義のあることであろう。しかし、氏の体調がそれを許さず、やむを得ず筆者が及ばずながら責の一端を果すことになった。

ガベン女史の学問経歴の概要を、主として既出の追悼文などからかいつまんで紹介していこう。業績はすでに以下のものに網羅されている。

“Schriftenverzeichnis Annemarie von Gabain 1928-1961.” *UAb* 33, 1961, SS. 5-11.

これは女史がハンブルグ大学テュルク文献学・シナ仏教學教授として六〇歳の誕生日を迎えたときの記念として H. Braun と I. Hamel が作成したものであった。ついで六〇歳の誕生日を記念して開催されたシンポジウムのプロスパーディングスの中に掲載された。E. A. Gruber と I. Hauenschild の著。

“Schriftenverzeichnis Annemarie von Gabain 1962-1980.” *Scholta, Beiträge zur Turkologie und Zentralasienskunde, Annemarie von Gabain zum 80. Geburtstag am 4. Juli 1981 dargebracht von Kollegen, Freunden und Schülern* (Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altaica 14, 1981, SS. 233-243.

そして、九〇歳の誕生日には、住まうのあった Anger で親戚による小さな会合が開かれたと聞けが、R. F. Hahn が次の目録を出した。

“The Published Works of Annemarie von Gabain: A Bibliography (1928-1990) with an Introduction, Translations and a Subject Index. Presented in Celebration of Professor von Gabain's 90th Birthday, July 4, 1991.” *CAL* 35:1-2, pp. 2-40.

のり子 P. Zieme の著十の補遺

Nachträge zur Bibliographie, in: “In memoriam Annemarie von Gabain (4. 7. 1901-15.1. 1993).” *ZDMG* 144:2, 1994, SS. 247-249.

が発表されている。

ガベン女史は、ユグノー派家系の陸軍少佐（のちに大尉）Arthur von Gabain を父として、カトリック教徒の Hildegard von Gabain を母として一九〇一年七月四日に Mörchingen (Lothringen) に生まれ、宗教的には母の影響を受けた。マインツ・フランケンブルグでの教育を経て、ベルリンに到り数学・自然科学を学んだが、ベルリン大学入学後は、フランク（Otto Franke）やクーニシュ（Erich Haensch）に師事してシンロジーの手ほどきを受け、また仏数学を修めた。博士号は一九二六年に『君主の書——陸軍の新語』（*Ein Fürstenspiegel. Das Sin-yü des Lu Kiu*）で取得し、その論文は一九三〇年に刊行された。おりしも一九〇二—一九一四年におよぶプロイセンントゥルファン探検隊の将来古文書が主としてミューラー（F. W. K. Müller）、ルロツク（A. V. Le Coq）そしてバング（Willi Bang-Kaup）の研究に委ねられていた。ガベン女史はバングに出会って以後、これが主たる研究対象となり、処女論文はバングと共著になる「マニ教の風神に関する

るウイグル語断片文書」(Ein uigurisches Fragment über den manichäischen Windgott) (一九二八年)であった。

女史はドイツ科学アカデミーにおいて、バングの若き協同研究者として、トゥルファンテキストの研究に従事して重要な成果を次々と世に送り、トゥルファン文献学の第一世代を継承することになった。基幹研究の一つとなったシリーズ、*Türkische Turfan-Texte* はバングと共著の形で一九二九年から一九三一年までに五巻と索引一巻が刊行され、一九三四年のバング編集の第六巻はガベン女史とラフマティ(G. R. Rachmati)の共著であった。このシリーズはラフマティとエーベルハルト(W. Eberhard)の第七巻(一九三六年)につづき、女史の単著で第八(一九五四年)が出され、共著としての第九(一九五八年)、第一〇(一九五九年)巻に到って終結した。これらの、仏教・マニ教テキストを中心とする研究はトゥルファン研究と中央アジア研究の一大成果として現在も基本的なものとなっており、とりわけ戦前の業績は後に述べるガベン女史の研究の基礎を築いたものでもあった。

さて、バングに先立つ四年前、ミュラーも世を去っている。トゥルファンテキスト研究が確実に女史によって継がれたことは、ミュラーの *Uigurica* の第四(一九三一年)がガベンとの共同編集となっていることに象徴的に示

されているといえよう。

一九三一年から一九三二年、女史はドイツ研究連合からの奨学金で中国に滞在することになり、任務として寺院・僧院を調査観察し、文書館で仕事をした。この際に入手したテキストをもとにしたのがウイグル版玄奘伝の研究(一九三五、一九三八)であった。

こうしてトゥルファンテキスト研究を継承、発展させつつ、数多くの現物テキストの基礎研究をもとにして編まれた女史の不朽の名著『古代テュルク語文法』(*Altürkische Grammatik*)は、その後の古代テュルク語テキスト研究に必須の工具書となつて、現在もその価値を失っていない。その第一版は一九四一年、第二版一九五〇年、第三版は一九八四年に出版され、さらにトルコ語訳が M. Akalin によつて一九八八年に出版され、また中国語訳も耿世民によつて準備中であるときく。世界の学界への多大な影響力をよく示す一事であるが、トゥルファン学における女史の影響力も大きく、一九六一年にベルリン・ドイツアカデミー報告書(SDAW)として出版された『高昌ウイグル王国(八五〇—一二五〇)』(*Das uigurische Königstum von Chotscho, ca. 950-1250*)は鷺見東親氏によつて一九六五、一九六九、一九七〇年にわたつて『愛知学芸(教育)大学研究報告(人文科学編)』に日本語で訳出され、一九八〇

年には『新疆大学学報』一九八二―二に耿世民の中国語訳が、また『新疆大学学報』のウイグル語版一九八〇―三にも載せられた。この書を発展させた『高昌ウイグル王国の生活』(*Das Leben in uigurischen Königreich von Qoco* (850-1250)) (一九七三年) も一九八九年になって鄒如山の中国語訳がトゥルファン市地方志編輯室から出版された。なお、女史は高齢をもとめせずに一九八二年の夏には中国を訪問し、北京やウルムチで講演をおこなったほか、トゥルファンの地も訪れている。

一九三五年、トルコのアンカラ大学に言語歴史地理学部が新設されると、女史は客員教授として赴いたが、その後も一九四五年までにウズベク語文法をも含むテュルコロジーに関する多くの業績をあげるほか、中央アジア言語や文献、歴史についての論文や多数の書評を発表していった。それらの内容は言語を中心とするばかりでなく、「初期テュルク族の生活における草原と都市」(Steppe und Stadt im Leben der ältesten Türken) (一九四九年) から『中央アジア研究入門』(*Einführung in die Zentralasienskunde*) (一九七九年) などに及んだ。ふりかえってみると、デビュー以来六五年間にわたる女史の研究生活で、単著・共著さまざまな形で名を見ることができた業績の総数は三〇〇点を超え、公刊のなかったのはごく初期の一九三二、

一九三六、一九三七年と敗戦後一九四六年からの三年間、そして最後の二年間だけであった。いずれも病気になるいは戦争が原因であった。

女史は一九四九年以後、一九六六年までハンブルグ大学にあってシナ仏教学・テュルク学を講じる間も、旧東ベルリンのアカデミー東洋学研究所(かつてのプロイセン科学アカデミー、のちの古代史・考古学中央研究所、現在のベルリン・ブランデンブルグ科学アカデミー・トゥルファン学術研究グループ)所蔵のトゥルファン・テキストの調査研究を委嘱され、年に一度以上はベルリンアカデミーを訪れて、研究を継続した。

この間、学会活動においては、一九五四年には当時のベルリンドイツ科学アカデミー通信会員に選ばれ、ドイツ統合によるその解散まで全うした。またウラル・アルタイ学会(Societe Uralo-altaica)を長期にわたって導き、*Ural-Alaische Jahrbücher*の主編をつとめ、さらには自由な雰囲気の学会をめざしてハイシツヒ(W. Heisig)やプリツァーク(O. Pritsak)とともにPIAC(常設国際アルタイ学会)の設立にかかわり、現在のシノール(D. Sinor)にひきつぐ前の四年間は事務局長をつとめて、その運営にあたった。日本において、一九六四年にはじまって現在まで毎年途絶えることなく続いている「野尻湖クリルタイ」

はPIACから多大の影響を受けているものである。

ところで、ガベン女史と日本の学界との直接の関連について触れておかなければならない。前述のように、護雅夫氏は一九五八年、ハンブルグに赴いて女史から古代テュルク語に関する個人指導をうけられて以後、ウイグル文書研究を手がけ、羽田亨氏なきあとの日本における独自の研究の道を開き、漢文文書との歴史的関連を指摘するなど、ウイグル文書研究の水準を世界的にも画期的な段階に押し上げた。<sup>(4)</sup>一方、山田信夫氏も一九六〇年のベルリン等の訪問以後、一九六一年には東ドイツ科学アカデミー東洋学研究所の委嘱によりウイグル文書の本格的な調査整理研究を開始し、ライフワークとしてのウイグル文書研究を継続され、過去のドイツにおける研究の進展に互して数々の貴重な歴史学的史料研究論文を発表された。<sup>(5)</sup>これらは、ともに女史の存在なくしてはありえなかったことであり、女史の広く深い見識を示す一事であらう。

女史は二度来日されている。最初は一九六二年九月から一年間、東洋文庫などの招聘により、東洋文庫、東京大学、京都大学などで講演や講義をされた。東洋文庫での講演は護雅夫訳によって『東洋学報』四五巻三号に「ウイグル王国における品位ある姿勢」として発表されている。二度目は東洋文庫付置のユネスコ東アジア文化研究センター

の招聘で一九七五年六月をはさむ比較的短期間であったが、東洋文庫、東京大学で講演やウイグル古文献に関するセミナーを開かれた。東洋文庫での講演は「Types of Artifacts on a series of wall paintings from Turfan」という論文として *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* の第三号に載せられた。セミナーはごく短期の集中であったが、まことに精力的なものであり、ウイグル文書の何点かを読解するものであった。筆者を含む若い大学院生らはその情熱と懇切さにうたれ、直接の指導に感激したことを昨日のことに思い出すことができる。

女史は、一九六四年から東洋文庫の名誉研究員となられ、実にこまめに自らの業績を、書評にいたるまで、その抜き刷りなどを東洋文庫へ寄贈され、学術交流への地道な努力を怠らなかつた。実際に訪ねられた足跡と学問的影響は世界各国にわたっており、ドイツ・フランス・英国・フィンランド・オーストリア・ハンガリーをはじめとするヨーロッパ諸国はもちろんのこと、アメリカ・旧ソ連（ペテルスブルグ・フルンゼ・タシケント・アルマトウなど）そして日本・中国ということになろう。

ハンブルグ大学を定年で退官して恩給生活に入ってから、も、活発な学術執筆活動は衰えることなく続いた。一九八

○年からはバヴァリア地方のアンガーに居を移し、世界の学者との通信は、マリアマリアバ（マリア姉さん）のサインをもってアンガーから発信されつづけた。最晩年の二年間、女史は親戚の世話でベルリンの西郊外の閑静な森に囲まれた家ですごされた。一九九一年には東西ドイツが統合され、旧東ベルリンとの往来もまったく自由になって、ツィーメ氏や、また女史が若き日々から通ったカトリック教会と親しく接することができたのであった。一九九二年の夏、ツィーメ氏の案内で、筆者は森安孝夫氏とともに、女史のお見舞いにでかけた。さすがに高齢で弱々しくなられてはいたが「足腰が少し痛むだけ」と言われ、中国での思い出を語り、また何故日本人はもっとヨーロッパ人にわかる言語で論文を書かないのか、と我々を鼓舞することを忘れたなかった。そのとき我々三人は小田壽典氏とともに編集中であった『ウイグル文契約文書集成』の最終段階の準備のためにベルリンで仕事をしていた。山田信夫氏が委嘱されて手がけられたこの研究成果は翌年末に刊行予定であった。これを、女史にも見ていただけるものと確信して辞去したのだが、それはついに間にあわぬこととなってしまった。

女史はベルリン郊外にある墓地に両親とともに眠っている。ベルリンのアカデミーはドイツ統合後に改組され、現

在のドイツにおけるトゥルファン出土テキストの所蔵は大きくいつて二つにまとめられた。純漢文およびサンスクリット関係は旧西ベルリンの国立図書館プロイセン文化財部門に一括された。その他のテュルク語・イラン系言語のものは、もとのままの旧東ベルリンのウンター・デーニリンデン八番の建物にあるが、先に述べたようにベルリン・フランドンブルグ科学アカデミー・トゥルファン学術研究グループの研究室ということになる。また、一部のテキストは、壁画や壁画銘文、棒杭、その他の出土品とともにゲーレムのインド美術博物館に蔵されている。いずれにしても、ベルリンを中心とするトゥルファン・テキスト研究体制のうつりかわりは、戦前・戦後のドイツ史、ヨーロッパ史を反映するものであり、そのことをすべて身をもって経験された女史の新しいベルリンにおける感慨はいかばかりのものであっただろうか。一九九四年のガベン女史追悼シンポジウムは、ドイツ統合とソ連崩壊後のヨーロッパにおいて、トゥルファン研究の大きな焦点が、女史の生涯の足跡とともにベルリンにあることを如実にものごたるものであった。

ガベン女史のテキスト研究を柱とする学問的業績は世界の学者を育て、その輝きを失うことなく、基礎研究の手法としての価値を保ち続けるに違いない。

註

- (1) Klaus Röhrborn, Wolfgang Veenker, "Annemarie v. Gabain(1901-1993)." *UAb* N. F. 12, 1993, SS. 1-4; Denis Snor, "In Memoriam Annemarie von Gabain." *Neusletter*, P. I. A. C. 21, May 1993, pp. 2-3; Klaus Röhrborn, Wolfgang Veenker, "(Zum Geleit)" *Memorie Munusculum, Gedenkband für Annemarie v. Gabain, Veröffentlichungen der Societas Uralo-Altica* 39, 1994, SS. VII-XI.; Peter Zieme, "In memoriam Annemarie von Gabain (4. 7. 1901-15. 1. 1993)." *ZDMG* 144:2, 1994, SS. 239-249.
- (2) 詳細は小田壽典「ベルリン・シンポジウム『アンネマリー・フォン・ガバインとトルファン研究』一九九四年十二月九日—十二日」『東方学』第九〇輯、一九九五年七月、一五九—一六七頁。同「付：ベルリン・シンポジウム一九九四年」(ペーター・ツィーメ著、小田壽典訳「高昌ウイグル王国の宗教と社会(訳その三)——中央アジア出土、古代トルコ語仏教文献の識語と施主」)『豊橋短期大学研究紀要』第二十二号、二九三—二九四頁。
- (3) 序言(山田信夫著『ウイグル文契約文書集成』I、大阪大学出版会、一九九三年、v.頁。)
- (4) 護雅夫氏のウイグル文書関係の研究は、現在刊行準備中の『古代トルコ民族史研究Ⅲ』にまとめて収載されることになっている。
- (5) 略年譜(『人と人』山田信夫教授追悼記念事業会、一九八九年、一一頁。)
- (6) その業績は没後に、『ウイグル文契約文書集成』全三巻として小田壽典・ペーター・ツィーメ・梅村坦・森安孝夫の編集によって刊行された。その初期準備段階では、庄垣内正弘氏、百済康義氏など日本人としてガベン女史とその学問に学んだ人も関わっていた。